慢性下痢ノ療法ト牛乳ノ関係 : Verhalten der Milchdiat bei chronischer Diarrhoe

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38516

デン」ノ獨乙內科學會ニ於テモ同一ノ疑義ヲ以テ反對セシモノアリ、然ルニ幸ニ其後人類ニ就テモ同一ノ試驗ヲ行フコトヲ得タリ、然モ其成績ハ同一ナリシ、其一例ハ咽頭ヂフテリ―后ノ癍痕收縮ニ基キ食道ノ閉塞セシ者他ノ一例ハ腐融藥嚙下ニ基キ食道ノ閉塞セシモノナリ、此二例ノ人工胃瘻ニ就テ同一ノ試驗ヲ行フコトヲ得タリ
 此試驗ニ基キ胃ノ分泌力衰ヘタル患者例之熱性病ノ如キモノニ肉羹汁ヲ與フルコトハ甚タ有益ナルコトヲ決定シ得ベシ且此試驗ヲ基礎トシテ肉羹汁ノ分泌催進作用アルコトヲ一層確實ナラシメタルモノトス
 又吾人ハ古來ノ習慣トシテ海ノ内外ヲ問ハス汁類ヲ食事ノ初發ニ飲用スル理由モ此試驗ニ由テ明ナリ
 胃病専門家ノ泰斗 *Boyd* カ何故ニ吾人ハ食物攝取時ニ必ス液体ヲ飲用スルカト云ヘル問題ニ對シ恐クハ消化液ノ分泌ヲ亢進セシモノナラント答エリ、此疑問モ此試驗ニ由テ氷解スルモノトス

○慢性下痢ノ療法ト牛乳ノ關係

Verhalten der Milchdiät bei chronischer Diarrhoe.

特別會員 佐々木 達

(澤 金)

疾病治療ノ原則トシテ最モ必要ナル條件ハ當該臟器ノ安靜ナリ、醫ハ其自然的治癒機能ヲ監督シ之レヲ妨クル條件ヲ避クレハ足ル、例之ハ肺炎、腸窒扶斯ノ如キ傳染病ハ平臥安靜ヲ命シテ血液ノ分配ヲ平等ナラシメ可及的其病的臟器ノ刺戟ヲ避ケ、一方ニハ心臟及脉膊ヲ監督スレハ特別ノ藥物ヲ用ヒスシテ治癒ニ赴クコト多シ、尙ホ著明ナル

例ハ骨折ノ療法ナリ即チ唯單ニ骨折部ヲ整復シ固定帶ヲ行ヘハ自然ニ治癒スルコトハ皆人ノ知ル所ナリ

然ルニ消化器病ノ療法ニ至リテハ當該臟器ノ絕對的安靜ヲ企ツルコト甚タ困難ナリ、場合ニ由テハ絶食ヲ必要トスト雖トモ長ク之レヲ持續スルコト能ハス然ノミナラス全身營養法ハ其病的臟器ノ快復ヲ促スニ甚タ緊要ナル條件ナリ、故ニ爰ニハ可及的病的臟器ヲ刺戟セサル營養法ヲ講セサルベカラス、是乃チ已往現在共ニ消化器病ノ食物攝生法トシテ特ニ牛乳食ノ賞用セラル、所以ナリ、是蓋シ誤リニ非ス當然理由ノ存スルモノトス

牛乳ハ己ニ人ノ知ル如ク毫モ不消化物ヲ含有セス、蛋白質、脂肪、抱水炭素及鹽分等ノ必要ナル滋養分ヲ完備シ、其各個ノ含量比例モ必要量ヲ滿タシ且其消化容易ナリ、故ニ最良ノ滋養食物ナルコトハ何人モ疑ハサル所ナリ、然ルニ斯ノ如キ必要ノ食物ト雖モ其消化ニ當リ消化器管ニ全ク障害ヲ與エサルモノニ非ス即チ一方ニハ又不利ノ点ナキニ非ス、蓋シ牛乳中ノ糖分ハ細菌ノ發育ヲ扶ケ腸管內ノ醱酵ヲ促シ以テ粘膜ヲ刺戟ス、脂肪ハ其吸收カ完全ナラサレハ蠕動機ヲ亢進セシム、「カゼイン」ノ凝固及脂肪酸ノ發生モ亦腸粘膜ヲ刺戟ス、此等ノ事實ハ往々實見スル牛乳性下痢ニ由テモ証明スルコトヲ得ベシ、臨床上ニ於テモ往々牛乳ニ堪エサルモノアリ或ハ腹部膨滿ヲ訴ヘ或ハ下痢ヲ起スモノアリ、斯クノ如キ障害ヲ發スル原因ハ恐クハ己ニ存在スル腸粘膜ノ炎症ナラン、蓋シ患者ハ直接腸ノ症狀ヲ訴エサルモ斯ノ如キ患者ノ便ヲ検査スレハ粘液ヲ發見スルコト多シ、尙ホ精密ニ病歴ヲ調査スレハ時々胃腸ノ症狀ヲ發スルコトアルヲ發見スルコトアリ、此事實ニ一致セサルモノハ粘膜抵抗力ノ個人的差違ヲ以テ説明セサルベカラス、例之酒五合ヲ飲用スルモ酩酊セサルモノニ反シ僅カニ五勺ノ酒ニモ絶エサルモノアルカ如シ

慢性下痢ハ其名ノ如ク皆頑固ニシテ治療ノ効力少キモノ多シ、殊ニ腸結核ノ下痢ノ如キハ如何ナル藥物モ効力少キヲ常トス、恰モ此頑固ノ下痢ハ腸結核ノ疑ヲ起サシムル殆ント唯一ノ既往症ナルコトハ皆人ノ知ル所ナリ、亦赤痢

ノ如キモ下痢ヲ停止シ得サル爲メ死亡スルモノ多シ、此慢性下痢患者ノ主食ハ牛乳ナルコト多シ、是レ上述ノ理由ニ基キ最モ適當ナル唯一食物ト信スルモノ多ケレハナリ、若シ此牛乳カ此慢性下痢ニ對シ恰モ治療ヲ妨クルモノナルコトカ明瞭セハ治療上ノ一大利益ト云ハサルベカラス、又一大變革ト云ハサルベカラス

此牛乳ノ下痢症ニ對スル不利ノ点ニ就テハ近來學者ノ注意ヲ引クコト、ナレリ、余モ亦此頃慢性下痢患者七例ヲ得テ親シク此關係ヲ實見スルコトヲ得タリ、此實驗ノ成績ハ皆全一ニシテ牛乳ハ炎症粘膜炎ヲ刺戟スルコトヲ明瞭ニ知ルコトヲ得タリ

此七例ノ病狀ヲ總轄スレハ其要点ハ次ノ如シ

- 一、下痢ノ經過ハ皆已ニ六ヶ月以上ニ亘レリ
- 二、便ノ性狀ハ皆粘液及血液ヲ混スル半流動性ノ下痢便ナリ
- 三、下痢ノ度數ハ皆一日五六回ニ及フ
- 四、直腸ヲ檢スルニ粘膜炎ノ發赤腫脹及ヒ糜爛面乃至潰瘍面ヲ有ス、其他癩痕収縮ヲ發見シタルモノアリ、痔核ヲ有スルモノアリ

五、黴菌的檢査上大腸菌ノ外結核菌若クハ赤痢菌ヲ証明スルコト能ハス

六、病源上二例ハ痔疾、五例ハ結核若クハ結核ノ疑アルモノ

七、患者ノ食物ハ牛乳ヲ食スルモノ五例、之レヲ食シ得サルモノ二例ナリ

八、「インデカーン」反應ハ五例ニ陽性、二例ニ陰性ナリ

治療法及其結果ノ要点ハ次ノ如シ

患者ノ食物ハ最初ハ從來患者ノ習慣シタルモノヲ與エ二三日間ハ單ニ鹽里母ノミヲ投シ便ノ性狀ヲ檢査シ次テ下劑、次テ収斂劑ヲ投セリ、其結果ハ牛乳ヲ食セザルモノニハ収斂劑ノ効力直チニ現ハレ二三日ニシテ便ノ硬度ハ泥狀ニ硬結シ、其度數ハ一日一二回ニ減シ、血液粘液ハ殆ント消失ス、之レニ反シテ牛乳ヲ食スルモノニハ収斂劑ノ効力少ク、十日間以上収斂劑ヲ繼續スルモ便ノ性狀及度數ニ大差ナシ、此患者ノ牛乳食ヲ中止セシニ頓ニ便ノ性狀ヲ快復シ一二日ニシテ泥狀ニ硬結シ其ノ度數ハ一二回ニ減シ粘液血液ノ殆ント消失スル等前者ノ結果ト異ナル所ナシ、試ミニ一定時日ヲ經テ再ヒ牛乳ヲ與フレハ直チニ前ノ性狀ニ復ス、然レトモ稍輕度ナリ、又再ヒ牛乳食ヲ中止スレハ便ノ性狀ヲ恢復スルニ至レリ、其他牛乳中止ト共ニ熱ハ下降シ、尿量増加シ、營養快復シ、体重モ亦増加セリ吾人ハ上述ノ實驗ニ基キ次ノ如ク解決スルコトヲ得

一、牛乳食ハ下痢ノ度數ヲ増加シ、粘液及血液ノ排泄量ヲ増加セシム

二、牛乳食ハ収斂劑ノ効力ヲ妨ク

三、牛乳食ヲ廢スレハ頓ニ下痢ノ度數ヲ減シ、便ノ硬度ヲ増加シ、血液及ビ粘液ノ排泄量ヲ減ス

四、牛乳食ヲ廢スレハ下痢患者ノ熱ヲ減シ、尿量ヲ増加シ、營養ヲ快復シ体重ヲモ増加ス

五、牛乳食ヲ廢スレハ収斂劑ノ効力ヲ速カナラシム

結論 牛乳ハ炎症腸粘膜ヲ刺戟シ慢性下痢ノ症狀ヲ増悪セシム其中止ハ炎症腸粘膜ノ治癒期ヲ障害セス、慢性下痢ノ症狀ヲ輕快若クハ治癒セシム故ニ牛乳ハ慢性下痢ニ適當セザル食物ナリ

尙ホ病歴二例ヲ添エ參考ニ供ス

第一例

N

M

某

四十六年ノ男

肥料商

(血族ノ關係) 父ハ六十五歳ニテ下痢症(?)ニテ死ス、其他遺傳的關係ノ徵スベキ者ナシ

(既往病歴) 生來强健ナラズ幼時麻疹ヲ經過シ、十五歳ニテ「マラリア」ニ罹リ、十九歳ニシテ梅毒ヲ患ヒ、二十二

歳ニ至リテ脚氣ニ胃サル、然ルニ此頃ヨリ何ノ原因ナク腸ニ障害ヲ來シ稍食物ノ不攝生ヲナストキハ直ニ下痢

スルノ傾向アリ爾來經過シ三十二歳ニシテ再ビ「マラリア」ニ罹リシモ醫療ニヨリ治セリ其後三十九歳ニ至リ赤

痢病ニ罹リシコトアリ時ノ症狀ハ裏急後重ヲ伴ヒテ下痢シ便ハ血液ヲ混ジテ一日三四回ナリシト、然レモ暫日

ニシテ全治セリト又一昨年ニ至リ蠓虫寄生シ驅虫セシコトアリ

嗜好品トシテハ特ニ記ス可キモノナシ 飲酒一合

(本病々歴) 昨年九月中旬稍不消化物ヲ攝食セシヲ原因トシテ爾來持續的下痢ヲ來シ其際ニハ輕度ノ下腹痛ヲ伴フ

而シテ其下痢ハ一日三四回ニ及ブ然ルニ其後一ヶ月ヲ經テ其下痢便中ニ多量ノ粘液並ニ血液ヲ混ズルニ至レリ

然レモ裏急後重ナク又初發以來更ニ熱發ナシ日々醫療ヲ受ケ其服藥ニヨリテ下痢度數ハ大ニ減シ其便ハ黑色

(蒼鉛劑?)ヲ呈シ且ツ軟便トナルニ至レリ爲ニ自ラ快方ニ趣キシ者ト考ヘ本年一月又稍食物ノ不攝生ヲナセシ

ヨリ再ビ前全様ノ症狀ヲ來シ粘液及血液ヲ混ズル軟粥様灰色ノ下痢便ヲ排泄スルコト一日四五回ニ及ビ身体益々

羸瘦衰弱ニ傾キ醫療ヲ受ケシモ下痢尙止マズ目下ノ状態ニ至レリ然レモ現今ニテハ下腹痛ナク無力性ニ下痢シ

殊ニ午後ニ其回数多シトイフ咳嗽、咯痰、盜汗ナシ食思不振

主訴 粘液、血液ヲ混ズル下痢便 一日四五回

(現在症) 体格中等、營養不良、皮膚粘膜炎血シ。舌ハ不潔ノ苔ヲ被ル。胸廓縱長ニシテ鎖骨上下窩及肋間甚シク

陷没ス。胸部理學の所見トシテハ聽診上肺胞呼吸音一般ニ幽微ナル外異常ナシ

腹部處見ハ一般ニ甚シク凹陷シテ舟狀ヲ呈シ腹壁上ヨリ推骨ヲ觸ル、コトヲ得尙S字狀部ニ輕度ノ壓痛アリ全時ニ其疼痛ハ肛門ニ波及スト云フ、其他硬結、浸潤ヲ認メズ、打診上ニモ異狀部ナシ

大便ヲ検査スルニ粘稠、泡沫狀帶黃色ノ粥狀便ニシテ鮮紅色ノ血液多量ヲ混ス但シ血液ハ限局シテ存在ス

尿ヲ検査スルニ蛋白、ヂヤツオ反應陰性、「インデカン」陽性[Ⓞ]

外科診察處見

直腸ノ下部ニ糜爛面アリテ觸診スルニ稍過敏ナリト

第二例 S K 某 二十九年 肥料商

(血族ノ關係) 遺傳的、家族的ノ疾患ナシ

(既往病歴) 生來健全ナラズトイヘモ亦記憶スベキ著患ナシ、麻疹ハ六歲ニシテ經過ス爾來時々感冒ニ罹リシコト

アリ、其後今ヨリ九年前痔瘻ニテ本院外科部ニ於テ手術ヲ受ケタリト、梅毒感染ナシ

九年前ノ肛門手術以來容易ニ下痢ヲ發シ硬便ヲ見ルコト少シ

(本病々歴) 昨年五月三十日不消化物(莢豆)^{カヤマメ}ヲ攝食セシ後ニ突然胃痛ヲ覺エ全時ニ嘔吐スルコト十四五回ニ及ビ次

テ胃痛ハ全ク消退セシモ是レニ代リテ無痛性ノ下痢ヲ發シ其便ハ水様ノ粘液性ニシテ茶褐色ヲ呈ス其度數一日

七八回ニ及ビ加フルニ甚シク食思不振ヲ伴ハリ而シテ初發來咳嗽、盜汗等ナキモ只少許ノ咯痰アリテ全身大ニ

羸瘦ニ傾ケリ依テ直ニ醫療ヲ受ケ服藥スルモ治ニ趣カズ荏苒經過シテ下痢尙止マズ終ニ今日ノ狀態ニ及ブ、現

今ニテハ下痢ハ一日五六回ニシテ便ハ粘稠性灰色ヲ帶ビ、時ニ裏急後重ヲ覺エ且ツ又時々腸ニ雷鳴ヲ伴フトイ

フ

主訴^① 下痢(腹痛ヲ伴ハズ)

(現在症) 概略

体格、營養共ニ不良、体軀纖長、皮膚、粘膜共ニ貧血殊ニ皮膚ハ蒼白ニシテ乾燥ス舌ニ白苔アリ

胸部理學的處見、右肺上葉ハ短調ニシテ聽診上ニモ此部ノ呼吸音弱シ

腹部ノ處見、一般ニ稍凹陷シテ腹壁ノ抗抵強シ、壓痛、硬結更ニナシ又蠕動機亢進等ナキモ觸診中時々雷鳴ヲ

聽ク、打診上左側下腹部ハ濁鼓音ヲ呈ス

尿ノ検査、「インデカン」反應著明

便ノ検査、帶褐灰色ノ流動便ニシテ粘液ナシトイヘトモ鮮紅色ノ血液限局シテ存在スルヲ認ム、臭氣甚シク泡

末狀ヲ呈ス

外科ニ於ケル直腸検査處見

肛門ヲ去ル一仙迷上方ニ於テ甚シキ狹窄アリ漸ク小指ヲ挿入スルコトヲ得ルニ過ギス其狹窄ノ上部ニ潰瘍アル

ガ如シ。尙肛門ノ右側及後側ニ裂創アリ

○晚發性遺傳梅毒ノ一例

Ein Fall der Syphilis hereditaria tarda

(明治四十年二月日本皮膚科學會第二十五通常會ニ於テ演說)